



◆特集インタビュー

短編の名手・杉みき子さんに聞く

未来に希望をつなぐ作品を

〈聞き手〉本誌編集部

(海沼松世、高橋秀雄、間中ケイ子)

二〇一九年四月八日(月)

上越市福祉交流プラザにて

□作家としての原点

——今日は児童文学界きつての短編の名手といわれる杉みき子さんに、雪国の風土と作品との関わりや作品へ込めた思いなどを中心にお聞きしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。まず、作家になったきっかけからお話いただけますか。

杉 特にこれといったものはないんですけど、小さい時から文章を書くのが大好きで、作文ばかり書いていましたね。本来引つ込み思案なものですから、自分から進んで書いて行こうと思わなかったし、戦争中の小学校、女学校から二〇歳頃までは、ばたばたと過ごしていました。

戦後の昭和二九年、『新潟日報』が「お母さんの童話」という読者の投稿欄を始めました。それまではコント、短歌、俳句欄はありましたが、これは今までにない異色なもので、選者は関英雄先生でした。そこに初めて書いて応募した「三本のマッチ」という三枚の短い童話が幸い入選し、それをきっかけに毎週一〜三編応募するようになり、ひと月に一編くらいの割合で入選させていただきましたね。

一年後、『新潟日報』が常連の入選者を集めた座談会で初めて選者の関先生にお会いしました。その時、関先生から少し長いものを書いてごらんといわれて書いたのが「電柱ものがたり」で、それが本格的に雑誌『日本児童文学』